「人生の寄り道」より

松　谷　武　夫　さん

傘寿(※1)を迎え人生を振り返りながら，私の書いた本「人生の寄り道」の中から，神戸空襲を綴(つづ)ったページを辿(たど)りたいと思います。

◆　神戸空襲

昭和２０年になりますと，戦局はさらに悪化，敗色が濃くなってきました。硫黄島の全滅の後，アメリカ爆撃機Ｂ２９が日本本土へ空襲を激しくしてきました。初めは軍需(※2)工場のある工業地帯へ，３月に入って東京・大阪・神戸へと大都会の住宅地に，無差別の空襲を加え，各都市へと広がって行きました。

私は忘れもしない３月１７日，深夜突然に警戒警報が鳴り，間もなく続いて空襲警報が発令となりました。神戸の街に敵機Ｂ２９の襲来(※3)です。Ｂ２９に向け山側と浜側双方(※4)からサーチライト(※5)を照らし高射砲(※6)で，上空では日本の戦闘機も応戦です。敵機は照明弾(※7)を手がかりに爆弾や焼夷弾(しょういだん)(※8)を，雨あられの如く投下しながら通り過ぎて行きます。

【神戸空襲】

３月１７日未明の大空襲により、兵庫区、林田区、葺合区を中心とする神戸市の西半分が壊滅，５月１１日の空襲では、東灘区にあった航空機工場が目標とされ、爆弾による精密爆撃が行われました。この空襲では、灘区・東灘区が被害を受け，そして６月５日の空襲では、西は垂水区から東は西宮までの広範囲に爆撃され、それまでの空襲で残っていた神戸市の東半分が焦土と化しました。

こうして、この３回の大空襲によってほぼ神戸市域は壊滅し，空襲による現在の神戸市域の被害は、戦災家屋数１４万１，９８３戸、総戦災者数は、罹災者５３万８５８人、死者７，４９１人、負傷者１万７，０１４人という大きな惨禍でした。

両親や兄弟３人の家族は，我が家に隣接する大きな防空壕(ごう)の中へ避難しました。やがて近くの住宅に火の手が上り，消火活動をしても次々と至る所から住宅が燃え，そして周囲全体が火の海となって行きました。この様子を見て危険を感じた父は，このまま防空壕(ごう)にいると窒息死や焼死の危険があると判断して，学校に避難することになりま

した。

防空壕(ごう)を出て近くの学校に避難するとしても，これまた大変な命がけです。この時すでに周囲の家は燃え盛る火の海です。凄まじい熱風が吹き火の粉が舞い散る，その中を潜り抜けながら学校に向いました。頭にかぶっている防空頭巾(※9)や衣服に飛んで来る火の粉を払いながら，燃える我が家の前を通り親子一緒に，やっとの思いで学校に避難しました。

避難した校舎で，両親は警戒したり兄弟は職員室に身を潜めていました。学校の建物は上から見てコの字型の鉄骨３階で木造２階建の別棟と廊下で接続し，その廊下はシャッターで閉ざされています。この当時は各教室の廊下に，大きな樽(たる)を置き水も入れバケツも用意していました。そのシャッターの所から燃えさかる木造校舎の火が，鉄骨校舎の廊下に入り込むと一大事です。１階２階共大人は水を掛けて警戒したようです。

そのうち，木造校舎は燃えつき崩れてしまいました。戦時中でストーブは使用しなくても，壁に煙突の穴があり，そこから火の粉が舞い込んでカーテンを焦がす様です。別の所ではコンクリート壁面の外側で熱い炎が渦巻いたのか，その内側の木の床は一部が焦げていました。直接火が入らなくとも発火の恐れもあり，安心は出来ませんでした。

暗闇を赤く焦がし，長く燃え続けた大きな炎も収まりかけました。長く感じた深夜の悲劇は悪夢のようでした。やがて次第と東の空が明るくなり始めました。そしていつもの朝日が差し込んで来ます。周囲の街は驚くほど一変していました。これまでの多くの家が一晩で焼失してしまい，哀れ残酷なまで変貌(※10)した焼野原でした。避難出来た学校が運よくポツンと残りました。山側は時々遊びに行った会下山(えげやま)(※11)が見え，浜側はこれまで見えなかった山陽本線の高架が見えます。荒涼(※12)とした焼野原を，ぼんやりと見詰めていました。

１０歳の少年の心に，全く想像を絶する恐ろしい生き(※13)地獄を見た様な悲惨な光景は，今なお脳裏に焼き付いています。両親は苦難の中この先どう生活して行けるのか，茫然(ぼうぜん)(※14)自失(じしつ)です。幸い中道国民学校のおかげで家族の生命が助かったのが救いでしょうか。

焼野原の我が家の跡は，全てが灰になり残された物はありません。ただ供出(※15)用に集めていたアルミ貨幣は溶けた固まりになり，又ご飯を炊く釜の中は，お米が炭の様な焦げた固まりになっていました。

空襲の時，近所で死亡された人がいました。遠く離れた火葬場へと移送されました。犠牲者も多く処理しきれません。混乱の非常時だけに葬儀も出来ず，家族で処理して下さいとのことでした。仕方なく離れた所で荼毘(だび)(※16)に付し，誠に哀しいお気の毒なことがありました。

こうして中道国民学校で１週間ほどローソクの灯りで寝泊まりしました。にぎり飯や缶詰など，伊丹(いたみ)から送られた様です。簡単な診察もありました。空襲の煙の影響か，私は目の痛みと頭も少し痛く，ぼんやりしていました。又入浴は出来ず，肌着は無く着替えも出来ませんでした。

戦時中のことで戦災者への支援は余り無く，途方に暮れる日々でした。その為神戸を離れて，母の故郷倉敷へ行く事になりました。

終戦そして戦後の１０年，両親は大変ご苦労をされました。私も長く苦難の少年時代･青年時代を過ごしました。あの当時を想い，過ぎ去りし日の記憶が甦(よみがえ)って来ます。

※1 傘寿…「傘」の略字の「仐」が「八十」と読めることから数え年の 80 歳。
※2 軍需工場…軍隊が必要とする武器類などを製造する工場。
※3 襲来…激しい勢いでおそいかかってくること。
※4 双方…両方。
※5 サーチライト…ランプに反射鏡やレンズを組み合わせて、ある限られた範囲をほぼ平行な光ビームで照らす装置。
※6 高射砲…飛行機を射撃するのに用いる中小口径砲。発射速度が速く射界が広い。もと陸軍での呼称で，海軍では高角砲といった。
※7 照明弾…夜間の戦闘で照明や信号に用いる弾丸。
※8 焼夷弾…焼夷剤と少量の炸薬(さくやく)とを入れた砲弾または爆弾。油脂焼夷弾，エレクトロン焼夷弾，黄燐焼夷弾など。
※9 防空頭巾…太平洋戦争末期の日本で使われた、空襲の際に落下物 から首筋や顔を守る頭巾。
※10 変貌…姿や様子などがすっかり変わること。
※11 会下山…兵庫県神戸市兵庫区会下山町にあり，長田区との区界隣接する標高８０～８５ｍの山。

※12 荒涼…荒れ果ててものさびしいこと。
※13 生き地獄…生きながら地獄にあるようなひどい苦しみにあうこと。また、そのありさま。
※14 茫然自失…あっけにとられたり、あきれはてたりして我を忘れてしまうこと。
※15 供出…政府などの要請に応じて食糧や物資などを差し出すこと。
※16 荼毘に付す…亡くなった人を火葬すること。